

# キリスト教記念式への一提案

中 野 敬 一

## A Proposal for Christian Memorial Service

NAKANO Keiichi

### Abstract

A memorial service in a Japanese Christian church refers to a special service memorializing the deceased and is held after the funeral services. The role of a memorial service is not only to “comfort and console the bereaved family” but “commend the deceased to God”. I insist that the memorial service handles the latter more positively. There is a deep relationship between commending to God and comforting the dead. For the bereaved family who are saddened, the destiny of the dear departed after death is of great interest. However, there are concerns when we think about life after death. The reason why we have a lot of images about the world of the dead through our culture, traditions, other religions like Japanese Buddhism, we must give our careful consideration to the hope after death, it must be in line with the Christian concept related to the dead and after death. In this paper, I have examined the Christian view of death in the Bible and the Christian history. As a conclusion, I understand the Bible has not explained about the situation of the dead in detail and it suggests that we are not allowed to know about matters after death, everything is left to the imagination. In the Christian history, we could find various ideas of the life after death, such as hell or purgatory, but it was a deviation from the Gospel. The bible show us what we can do is to entrust to God, who is beyond human imagination or understanding. As holding memorial service, we insist that we have no choice but to place our hope in God.

**キーワード：**記念式、死後、聖書の死生観、霊魂不滅、日本人の死生観

**Key words:** memorial service, after death, the Bible's view of life and death, immortality of the soul, Japanese view of life and death

## はじめに

日本のキリスト教会、特にプロテスタント教会において、記念式について大きく取り上げられることは少ない<sup>1</sup>。最大規模の日本基督教団で使用されている『日本基督教団口語式文』（1959年刊）でも記念式執行の指示は「一ヶ月、一ケ年、3ケ年、7ケ年など適当に執り行いがよい」と説明があるだけで、式次第も他の諸礼拝と比較して最も短いものとなっている。1990年に発刊された『新しい式文 試案と解説』ではようやく「キリスト教の歴史と伝統の中では、死後三日目、九日目、四〇日目など、主の復活の告知を表す三、またはそれをさらに三倍した九、それに聖書的に象徴的な四〇に基づいた日数、年数などによる考え方があったようである」という説明が加えられ「日取りについて特別の基準はない現状においては、適当な期間をおいたのち、教会の暦に関連させて、復活節や聖霊降臨節などの一日を選ぶことが意義深いと思われる」と述べられている。しかし、なお試案の段階であり、説明は十分とは言えない。記念式を行う基準は曖昧であり、各個教会の伝統や教職者の裁量に任せられている現状となっている。実態としては五〇日目や百日目、一周年という節目の時や仏教の法事にちなんで行われていることが多いが、必ずしも行われるとは限らない。これは葬儀後に一連の仏事（法事、法要）を行っている日本の仏教の場合と比べると大きな違いである。

仏教の場合は、死者が祖先の群れに加わるための必要な過程として諸儀式を行う。キリスト教にはそのような考え方は無く、何時行うのか、どのように行うのかが明確に決まってこない。結果として、日本のプロテスタント教会における記念式は「教会の儀礼としてはきわめて軽い扱い」になっている<sup>2</sup>。しかし教会の現場では、信者の大きな関心事になっていて「死んだ人の記念式をどのようにしたらよいか」あるいは「仏教の法事のようなものはキリスト教には無いのか」といった質問があるという指摘がなされてきた<sup>3</sup>。質問の背景には死者のために何かをしたいという願望もあると推測される。教会はそれらの声に十分応えてきたのかを問いつつ、記念式の目的や方法、さらに式で語るべき内容について検討を行う必要があるだろう。

記念式の目的を考えるには、「葬儀」の目的が参考になる。葬儀の歴史をここで詳細に論じることではできないが、遺体を埋葬する前に必要な儀式として始まったものが、キリスト教の歴史では埋葬を中心に置きながらも、時代に応じて目的が付加されてきた。近代のプロテスタント教会の葬儀理解は「遺族を慰める」ということが重視され、葬儀は「遺された者のために」行うことが目的とされている。つまり、「死者のために」行うという考えが乏しい。その理由は、死者の救いを強調し煉獄思想や死者のためのミサの重要性を説いた中世のローマ・カトリック教会を批判した宗教改革者や、それに続く福音主義教会の伝統に基づくと考えられる。しかし、ルターらが否定したのは死者のために功績を贈るための所業は否定したのであり、死者のために祈ることまで否定したわけではない。ルターも死者の魂に神の憐れみがあることを願い祈っている<sup>4</sup>。また、油木は死者を「神にゆだねる」ことに注目し、それが無ければ「遺族を慰める」ことも言葉だけに終わってしまうと指摘する<sup>5</sup>。死者のために何かをすることは

遺族の願いであることも多く、それで遺族が慰められることにもなる。ホワイトは葬儀の目的として「遺族を慰めるため」と「神の配慮に死者を委ねる」とする。そしてキリスト教の役割が「生きている人々への牧会」と「召された人々への牧会」であり、「この両者は切り離し得ない」と述べている<sup>6</sup>。われわれもこれに同意できるのではないだろうか。

葬儀における二つの目的は記念式にも適用されると思われる。実際、葬儀だけでそれらの目的を達成することは不可能と言える。遺族の悲嘆は一時的ではなく継続し、増加もする。時の経過とともに遺族は葬儀の時とは異なる悲しみや寂しさを覚えることもあるだろう。喪の作業としての記念式の役割は非常に大きいと言わざるを得ない。

ちなみに記念式には名称が示す通り、死者を「記念する」という目的もある。死者を偲びながら上記の目的を果たすという意味において重要である。しかし、死者の生涯が式の中心的関心の対象となることには問題がある。記念式が礼拝であるならば、死者を讃えるのではなく、神を讃えるのである。ウィリモンは、葬儀は「神を礼拝するためになされるもの」と主張するが、記念式においても忘れてはならない視点であろう<sup>7</sup>。

さて、われわれは記念式における「死者のための」という目的を再確認することが必要となる。これは上で述べたように「遺された者のための」という目的にも関連する事柄である。その際、重要となるのは死者の状態についての考察である。この作業が無いとわれわれは勝手な想像によって、死者を神に委ねることになる。そこで、本稿においてこの作業を踏まえて記念会を行うことを提案したいのである。

## 1. 死者の状態について

キリスト教の死後理解を知るために、旧・新約聖書に表される「死者の状態」を考察し、キリスト教の歴史においてその理解がどのように変遷していったかを確認する。

### 1) 旧約時代から

旧約聖書では人が死ぬと塵に返るという見方がある。創世記において、人は神によって土の塵で形づくられ、命の息を吹き入れられたことで生きる者となった。しかし罪を犯した人（アダム）は神から「塵にすぎないおまえは塵に返る」と宣告される。ここに、人の死があるのは罪の結果によるという理由と、人間は永遠に生きる存在ではなく有限の存在であることが示されている。人が死んで塵に返るという考えは、ヨブ記34章14-15節や詩編90編3節、104編29節、コヘレトの言葉3章19-20節などにも同様の見方がある。人間の命は神からの賜物であり、その命には限りがあるということである。人は必ず死ぬ存在であり、不滅であるのは神のみである。これが古代イスラエル人の死に対する基本的な考え方である。

この考え方に異なった死生観が加わる。人は死ぬと死者は陰府（シェオール）と呼ばれる下界へ行き、レファイームという霊でも肉でもない「影のような」存在となってそこに留まるというものである。このような死後生観は当時のセム族一般のもので、シェオール観はカナンの民俗宗教から来たものであると言われている<sup>8</sup>。ゆえに、旧約聖書は陰府の起源や神話には関心をおかず、そこにおける死者の存在形態に関する思弁も発達させていない<sup>9</sup>。死者が陰府に

「下る」という表現で陰府が地下の世界にあると示すことや、陰府は暗く醜い場所であるというような描写があってもそれ以上の具体的記述は少ない。重要なのは、陰府は神の支配が及ばない所と捉え、それゆえ信仰者が不安と驚怖を感じることである。例えば詩編88編では、陰府において「あなたはこのような者に心を留められません。彼らは御手から切り離されています」（6節）とある。また、イザヤ書38章18節には「陰府があなたに感謝することはなく、死があなたを賛美することはないので、墓に下る者はあなたのまことを期待することができない」とある。逆に同じ詩編には139編8節の「陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます」と、陰府も神の支配領域であるとの信仰も表されている。しかし、死者が神から遠ざかった陰府に留め置かれることにおいては同じ運命である。

さらに、陰府はすべての人間が下る場所であり、そこでは義人も罪人も区別が無いと考えられていた。サムエル記上では、イスラエルの初代サウル王がペリシテ人との戦いにおいて窮地に陥った時に、口寄せの女を訪ねて死者サムエルを「呼び起こした」という出来事がある。このときサムエルはサウルが自分を呼び起こしたことに憤慨しつつ、神がサウルを見放しイスラエル軍が敗退し、サウルも敵の手により殺されることを述べる。そして「明日、あなたとあなたの子らはわたしと共にいる」（28:19）と予告する。これはサムエルのような義人も神に背き罪人とされたサムエルも同じ死界に下るということを指している。

陰府の死者はどのような状態で在るのだろうか。聖書は、陰府において死者は「眠っている」と描写する。先に引用したサムエルも口寄せが「呼び起こした」とあるので、陰府で眠っていたと考えられる。また、ヨブ記には陰府に「寝床を整えた」（14:13）とあり、陰府におちたすべては「塵の上に横たわっている」（14:16）という記述も見られる。「眠っている」とは比喩的表現であるが、死により神から分離された人間の限界や無力さを示唆していると言えるだろう。

しかし、紀元前6世紀のバビロン捕囚後には黙示文学の発達により、このような死後観に変化が訪れる。国を失った捕囚民が民族国家としての形態を回復したいという悲願を持ち終末論的な復活思想が登場する。例えばイザヤ書24-27章は、初期黙示文学の特色をよく示している。神の世界支配への信頼、政治への直接的かわりの後退、内面性の強化、苦難における忍耐と希望、民族の復活の希望から個人の復活への希望、などである<sup>10</sup>。ここでは、「あなたの死者が命を得、わたしのしかばねが立ち上がりますように。塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え」（26:19）という言葉が見られる。眠っていた死者の「復活」という思想が見られるようになるのである。復活思想の背景にはバビロニアを滅ぼしたペルシアの復活思想の影響もあるとされている。

さらに、捕囚民を描きながらもかなり後代の紀元前2世紀に書かれたと推測されているダニエル書にも「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪的となる」（12:2）という記述がある。ここでは苦難にあった信仰者たちだけでなく、悪人の復活もよみがえるという思想を示している。アンティオコス4世によるギリシア化政策による迫害の中で信仰を死守した人々に対する報いの必要性から、単に信仰者の復活ということのみならず、自分たちを苦難に陥れる悪人の将来への関心に繋がっていつ

たのである。悪人たちが陰府という死者の世界に留まるという運命だけでは、報復処置としては極めて不十分である。すべての者が復活させられて最後の審判を仰がねばならない。そして、その後天国に行く義人と地獄に行く悪人に分けられ、悪人は苦しみ続けなければならないという願望が加わる。後には天国や地獄についての描写が具体的で詳細になっていくのである。

このような黙示的復活思想は、人が死後、陰府で眠り続けるという元来の死生観に大きな変革をもたらした。ただし、将来に復活という事態が生じるとしても、死者は陰府で眠っている状態で復活の時を待っているだけである。死者がどのような状態にあるのかについての詳細な記述は無い。理由として、人間が自力で死から生へ戻ることは不可能であり、復活を可能とするのは神のみであるという主張が背後にあると思われる。たとえ、義人であってもそれが許されてはいないことを聖書は告げる。他の者たちと同様に眠った状態で過ごしているのである。旧約聖書では、このように死者自身に焦点を合わせることなく、死者の状態についての記述は最小限にとどめているということを確認しておくことが必要である。

## 2) 新約聖書から

新約時代における死後理解を概観する前に、上述したイスラエル人の思想に加えて触れておくべき事柄がある。古代ギリシアのプラトンの靈魂不滅の考えである。これらの思想は後期ユダヤ教や初期キリスト教の時代から始まりキリスト教の歴史に大きく影響を与えてきた。ちなみに旧約聖書では、人間は魂と身体とに二分されず、神から与えられる命の霊によって生かされる具体的存在と考えられている。また、魂が靈的な存在として、死を超えて生き続けるという考えも見られない。

しかし、旧約から新約への移行期にあたる紀元前50年頃に書かれたとされる『知恵の書』（カトリックでは第二聖典の一書、プロテスタントでは旧約聖書外典の一書）にはその影響が見られる。「不滅」という概念が登場し、「義は不滅である」(1:15)、「神は人間を不滅な者として創造し、御自分の本性の似姿として造られた」(2:23)といった表現がある。そして、義人の靈魂の不滅が明らかに肯定されている<sup>11</sup>。彼らの魂は「神の手で守られ」(3:1)、「不滅への希望」があり(3:4)「永遠に生きる」(5:15)というのである。これは古代イスラエル人が、不滅や永遠であるのは神のみであると考えて来たこととは大きく異なる。

このような魂と身体との区別や靈魂不滅という考えは、新約聖書にも反映されていて、イエスの発言にもその影響が見られるような箇所がある。マタイ福音書10:28には「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」とあり、身体と魂の区別が語られている。

パウロにおいても、身体と靈魂を区別した考えが見られる。霊と肉という表現を用いて展開している。しかし靈魂不滅の思想を押し進めているのではない。彼が靈魂の救いということだけを考えていなかったことは、終末における復活を強調していることから理解できる。靈魂のみならず、体の復活が重要なのである。この体は現世と同じ体を指してはいない。最初は「自然の命の体」であり、復活するのは「霊の体」である（第一コリント 15:46）。

さて、このようにイスラエルとギリシアの思想が混在する新約時代において、主に死者がど

のような状態にあると考えられていたかについて新約聖書から確認する。最初に結論を述べると、旧約聖書の場合と同様、死者の状態についての詳細な記事はほとんど見つけない。

まず福音書においては、死者の状態に関わる用語としての「陰府」が、イエスの譬え話「金持ちとラザロ」（ルカ 16:19-31）に見られる。贅沢に遊び暮らしていた金持ちは死後、炎の中でもだえ苦しんでいるが、逆に病気で貧しかったラザロは宴席で慰められている。この描写は、陰府で眠っているという考えとは大きく異なるが、これは死者の終末における裁きにある状態とみなすべきであろう。ルカのみに伝わる特殊資料であるが、この場合はルカの特徴である富裕層への批判があり、ルカの教会における富裕層に対する警告的勧告というのが主要なテーマとも考えられている<sup>12</sup>。

その他の死後に関する用語として、「地獄」が使用されるが（マタイ 18:9 ルカ 12:5他）これらは終末の裁きに関わるものである。この地獄と訳されているギリシア語ゲエナはヘブライ語ゲー・ヒンノム（＝「ヒンノムの谷」）の音訳であり、この谷はエルサレムの南にあり、後期ユダヤ教の伝承では最後の審判が行われる舞台とされた。ここでも終末の裁きにおける死者の状態と考えられるであろう。

福音書全体を通してイエスは死後のことについて多くを語っていない。宣教の中心は「神の国」であり、その内容は終末の希望や死後の場所としての天国を指しているのではない。神の支配が切迫している今現在における救いと新しい生き方への招きが強調されているのである。死後を語る場合もその状態が問題でなく、現在における悔い改めを主眼としている。

パウロの理解はどのようなものであったのだろうか。まず彼の死の理解は人間の罪との密接な関係で捉えられている。死を罪の結果と考えた旧約以来の考えを肯定し、「罪の報酬は死である」（ロマ 6:23）と言う。そして、すべての人は罪人であり、だれ一人神の前に義とされることはないという前提に立っている。ゆえに「罪に仕える奴隷となって死に至る」（ロマ 6:16）のが人の運命であった。しかし、パウロはイエス・キリストによる贖いの業を通して、キリストを信じる者は義とされることを主張する。「キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。」（ロマ 8:1-2）とその確信を語るのである。

パウロは罪からの解放だけではなく復活の希望を説く。イエスによって義とされた者には復活の望みが与えられる。パウロは回心以前にユダヤ教のファリサイ派に属しており、黙示的終末論思想の影響を受けていた。復活のイエスとの邂逅は、人々の待望してきた義人の復活という出来事がイエスにおいて生じたと理解したであろう。すなわち終末がイエスの復活において遂に到来し始めたのである。パウロはイエスの再臨は近く、しかも自分たちの存命中に起こることを信じていた。やがて天から降ってくるイエスと出会い、いつまでもイエスと共にいることができると考えていたのである。

このような理由でパウロは死後の状態についての詳細を語ることはない。彼の関心は近い将来に起こるイエスの再臨であり、将来の自分たちに現される栄光であった。ただし、死者について語ることもあり、彼らより先にこの世を去ったキリスト者について言及している。

兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してください。主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。(第一テサロニケ 4:13-17)

パウロは既に亡くなった者の運命についての希望を語っている。死者を「眠りについた人たち」と呼び、彼らが復活すること、しかも現在生きている者たちより先にそれが起こると言う。この発言は神学的というより、死者のことで心をわずらわしている信徒への牧会的配慮とも考えられるが<sup>13</sup>、ここでも、パウロが死者の状態について「眠っている」という比喩的表現を用いるのみで、それ以上の詳細を語っていないことに注目したい。その他の死者に関する箇所(例えば第一コリント 15:12-58)においても、死の状態について語る事は無い。自分たちも死者も「朽ちない者」とされる希望を語り、死ではなく復活による新しい生を語るのみである。

このようにパウロは死者の将来に関して、イエス・キリストの死と復活の出来事による新しい視点を多く示しているが、死者の状態に関する記述はほとんど見られない。パウロの考えは旧約時代からのものと殆ど同様である。イエスを信じて「眠りについた」死者は来るべき復活の時を待つだけであり、死後の状態については、それ以上の詳細を語ることをしない。またパウロは死者のよみがえりの確かさについては語るが、よみがえりの経緯の詳細も語っていない。

新約聖書において死後の状態に関する他の記述も確認しておこう。終末期にすべての死者が復活して最後の審判を受けるという思想があるのは、一世紀後半に書かれたとされるヨハネ黙示録である。著者はユダヤ教黙示思想に規定されたユダヤ人キリスト教グループに属していたと考えられており、その思想はすでに述べた義人の復活理解や最後の審判と同様である。間近に迫り来る終末の幻とイエスを信じた殉教者たちの運命が描かれている。彼らはキリストの再臨により復活させられ、千年の間、地上を統治するという。この間彼ら以外の死者すなわち不義なる者たちは復活できない。この千年が終わるとすべての死者が死から起こされて彼らの行いに応じて最後の裁きが行われる。命の書に名が記されなかった不義なる者は「火の池」に投げ込まれる。この思想の背景はローマ帝国による小アジアの諸教会に対する迫害である。ローマ皇帝礼拝を拒否したキリスト者が血にまみれた激しい迫害を経験した状況で、義人の復活や不義なる者に下される永遠の刑罰を信仰者たちは期待したのである。ヨハネ黙示録には、一般的な死理解としての「第一の死」に対して「第二の死」(2:11、20:6他)という表現を用いて復活にあずかることのできない永遠の滅びが語られている。われわれが注目することは、ヨハ

ネ黙示録においても死者の状態が示されていないことである。眠りにつた義人の復活と迫害した者の裁きに強調点を置くだけである。

さて、以上のように、人の死後の状態に関する詳細情報は、旧・新約聖書からほとんど得ることができない。われわれが確認すべきことは、聖書が描いていないことに想像力をたくましくして語ることを慎まなければならないということである。聖書の各著者が、単に情報が無いからという理由ではなく、人間には語ることでできない領域を意図的に描こうとしていなかったことは重要である。彼らは神が天におられることを語っても、天の様子は語らない。イエスの復活を語っても、それがどのように起こったかは語らない。神の領域に属することを自由勝手に描くことをしないのである。そこには信仰者の神への全幅の信頼をみることができるのではないだろうか。人間に理解不能な領域は神に委ね、神が人知を超えた最上のものを賜るに違いないという確信することが、信仰者に求められていると思うのである。

### 3) キリスト教史における変遷

われわれが確認した聖書における「死者の状態」に関する考え方は、以後のキリスト教の歴史において変遷していくことになる。長い歴史をすべてここで網羅することはできないが、要点と思われることを確認していきたい。

初代キリスト者たちは、イエスの復活により終末は既に始まっていると信じてきたが、現実としてイエスの再臨は起こらなかった。そこで「終末（再臨）遅延」の問題が生じたのである。彼らが持っていた切迫した終末への期待が裏切られるうちに、終末についての再議論や再解釈が行われるようになった。イエス再臨の時期に関する問いと同時に、眠っている死者の運命が問題になる。死者は終末まで眠り続けるのか、別の状態で存在するのかが興味の対象となってくる。そして、終末の復活から靈魂の不滅へと人々の関心が向いていくのである。人は死ぬとただ眠り続けて待つのではなく、すぐに天国にいけるという天国観がキリスト者の民間信仰として拡っていった<sup>14</sup>。それと同時に陰府や天国、地獄への想像力も強まるようになり、やがて中世ヨーロッパではローマ・カトリック教会が信徒の需要に応える形で、天国観や地獄観、煉獄観を教理の中に取り入れるようになる。終末における最後の審判はさらに遠い未来に押しやられる中で、死者が住んでいると考えられた天国や地獄への関心が強まったからである。

このような天国観や地獄観、煉獄観は、人々の死後に関する考えを大きく変化させた。聖書で語られなかった死者の状態が、人々の想像の中で自由に描かれた。さらにギリシア的な霊肉二元論は中世キリスト教世界にはしっかり植え込まれており、身体を離れた魂でさえも、もう一つの目に見えない物体であるかのように思われるようになっていた<sup>15</sup>。中世の宇宙像に基いて、魂は死後、天国に昇って至福を享受するか、地獄へ下って拷問と刑罰に呻き苦しむかのよう考えられたのである。

このような想像の世界が出来上がることによる弊害は、神の恵みが矮小化されることであろう。すでに信仰者に与えられていた復活の約束に対して疑念が生じてくる。イエス・キリストの贖いのわざによって義とされ、どんな被造物も信仰者を神の愛から引き離すことはできない（ロマ 8:39）というパウロの確信も影を潜めていく。罪の赦しの確信が得られず人々は不安に



陥り、神の恩寵ではなく神の裁きに関心がいくことになる。俗説と結びついて死後の世界はさらに多様に描かれ、恐怖心をかき立てられる地獄等の描写が増えていった。もはや聖書の信仰とは別物の信仰が出来上がってしまうことになったのである。

ところで、煉獄はローマ・カトリック教会がマタイ福音書12章32節やマカバイ第二書12章39-45節などの聖書を根拠としてその存在を認めている<sup>16</sup>。煉獄の言及は古くは教父時代から見られ、中世の教会会議においてローマ・カトリック教会の教義とされたことで人々に多大な影響を及ぼした。「死者のためのミサ」が行われ、後には「免償符」が登場する<sup>17</sup>。煉獄にある死者の魂の浄罪の期間を短縮するために、生きている者が免償符を購入する功德を積み重ねるようになった。しかし、ルターら宗教改革者たちがそのような教会の姿勢を批判し、「宗教改革」運動を行ったことは周知の通りである。パウロの思想を基本に据えて、徹底的に信仰のみによって義とされることを主張し、キリストを信じる者が救いに与るのは死後ではなく、現世のただ中であることを強調した。神の恩恵により信仰者はこの世において既にキリストの永遠性につながる「永遠の命」に与っているのである。

さて、キリストによる救いを将来に求めたのではなく、すでに今あることを語り続けたルターの思想は、あらためてパウロの主張を人々に浸透させることになったのと同時に、死後の状態に関する自由な想像に歯止めをかけるものとなったと考えられる。ルターはパウロと同様に死後の世界や靈魂に関しても関心をほとんど払っていない。ルターも死を「眠り」という表現を用いて、復活までの死者の状態についても眠りという以上に明確な形で示してはいない<sup>18</sup>。

『死への準備についての説教』では、次のように勧めている。

あなたは死を、死そのものとして見たり考えたりしてはいけない。また死をあなた自身において、あるいは自分の自然性において、また神の怒りによって滅ぼされた人々や、死に打ち負かされた人々において見てはならない。むしろあなたは、自分の目と心の思いとすべての感覚とを、死の姿から強引に引き離し、死をば、ただ神の恵みのうちに死んで死に打ち勝った人々において、ことにキリストにおいて、またすべてのキリストの聖徒たちにおいてのみ見るように、たゆまず努めなくてはならない<sup>19</sup>。

ルターは、死や罪、陰府を見つめすぎることなく、終始神の恵みをひたすら見るように勧めている。不安や不信が生じることになるからである。例えば、「陰府」についても、これを見つめすぎることにより、「無益無用な好奇心や危険な料簡」を起こし、自分の救いの予定を疑うことになると言う<sup>20</sup>。ゆえに「陰府を天において見るようにして、神の恵みから決して引き離されることがないように」と言うのである。人を不安に陥れる死や陰府を考えるとときには、必ずキリストにおける神の恵みとひと組にして考えよということであろう。

ルターのこの指摘に十分耳を傾けることは必要である。聖書やそれに基づく宗教改革者の思想から学ぶべきことは、死後の状態に関心を向けすぎないようにする、ということである。死後の状態を勝手に想像することで、神の恵みへの信頼を失うことや、神の救いに疑念を抱くことになるからである。ルターは聖書の著者たちの意図を十分に汲み取っていたと思われる。

人が自由勝手に煉獄や地獄などの姿を描き、それにより驚怖を煽られていく様は、聖書の著者たちが避けたかったことであろう。

われわれが葬儀や記念式において、死者の状態について語る時には細心の注意を払うことである。人間には未知である神の領域を描くことにより、福音理解が根本的に揺らいでしまう危険性を、キリスト教の歴史から確認しておくことは極めて重要であろう。

## 2. 靈魂不滅という考えについて

### 1) その問題点

死後の希望、すなわち復活の希望はキリスト教において際立った特徴である。パウロは、キリストが死者の中から復活し、「眠りについた人たちの初穂」となったと言う。そして、キリストが復活したのだから、われわれも復活するという希望が語られている。しかし、今日の日本のプロテスタント教会において、「終わりの日」に起こる復活についてのキリスト者の関心は、それほど強いものであろうかという疑問がある。教会の現場、特に葬儀等で終末の復活についての希望は語られるが、むしろ死を超える神との関係性を重視することが多く、現代のプロテスタント神学も「永遠性を現時点での信仰の生の深みに見出す」傾向が強い。クルマンが、われわれは、キリストの復活と将来に起こるわれわれの復活の間の「中間の時」に生きており、死者は「中間状態」にあると主張したことについても、そのような理解が今日の葬儀や記念式で聞かれることは、ほとんどないだろう。

問題と思われるのは、復活への関心が遠ざかることにより、死者の状態が、靈魂という状態になるという考えに近づいてしまうのではないかということである。先に言及した初期キリスト教の時代の「終末遅延」の問題がその例となる。結果として、新たな世界観や死生観を作り上げてしまったことを後の歴史が示している。

われわれが確認すべきことは、靈魂不滅という考えはキリスト教神学にも取り入れられてきたが、聖書的な考え方ではないということである。人間は有限的な存在であり、永遠であるのは神のみである。また、聖書には身体が靈魂より劣っているという考えもない。たしかにパウロは「肉」なる人間の弱さや不完全さ、限界性を語り、「肉」と「身体」をほぼ同一視している箇所もみられ、そのように理解される場合がある。しかし、靈魂が不滅であるならば、身体の復活の必要性が乏しくなってしまう。これはパウロが語る終末における復活の確信と大きく異なってくることになる。

クルマンは、靈魂不滅の考えを明確に否定し、死後の人間の運命に関する新約聖書の教えを「靈魂の不滅」と考えることは「最大の誤った理解の一つ」と主張する。人は身体と靈魂において死ぬのであり、死は神によって創造されたいのちの「全体」の破滅である。つまり、死によって人は文字通りいのちの終焉を迎えるということになる。そこで、「いのちを呼び返す」ためには、創造という神の新しい行為が必要であるとし、復活とは「真に死んだ人全体が、神による創造という新しい行為によっていのちによみがえらされるという積極的な主張である」と述べる<sup>21</sup>。人は死ぬことによって身体も靈魂も滅亡するという「人間全体としての死」と、「全体的復活」ということであり、死も復活も「部分的」なものとして起こらないのである。

このような「全体としての死」の考え方は、人間には不滅の要素は全く無く、「創造者なる神との交わりの中で神によってよしとされる限りにおいて不死」ということを意味している<sup>22</sup>。人間の永遠性を神との交わりにおいてのみ見ることは、極めて重要な視点である。

しかしながら、靈魂不滅の思想は、明確な形ではなくても、日本のキリスト教会においても見られる。死後の靈魂観は日本の文化や伝統、宗教や習俗に深く根を下ろしているからであろう。また、日本だけでなく世界各地の宗教や信仰にも似たような考えがあり、その影響は極めて大きいと言わざるをえない。日本のキリスト教会で、「死者の『魂』をゆだねます」といった祈りが葬儀等でしばしば聞かれることから、その影響力がわかる。なにより問題となるのはやはり先に触れたように、靈魂不滅の思想から新たなキリスト教死生観が、異教的な要素と混ざりあって発生してくることである。

## 2) 日本人の靈魂観との比較

ここで、日本人のもつ靈魂観について言及しておこう。日本では人が死ぬと靈魂（魂）の状態になって「あの世」に行くという考えがあり、民族宗教や原始神道、仏教等においてその思想が展開されてきた。靈魂はあの世とこの世を行き来すると信じられ、個々の靈魂は祖霊となり毎年時を定めて家に戻ってくる。その信仰が日本に伝来した仏教による盂蘭盆会と結びついて「お盆」という日本独特の風習になったと言われている。死者が靈魂として存在し活動するという考えは、日本人に馴染み深いと言ってよいだろう。霊の存在やその影響を信じている人の数も少なくない<sup>23</sup>。このような考えが消失しない理由は、それが人々の望みであり続けているからであると思われる。死というこの世との別れを経験したとしても人は何らかの存在として残り続けたいと願う。自分が死んだ後は自らも靈魂として愛する者たちに再会することを願い求めたり、あるいは先祖の霊として生きている子孫の所へ行き交流を持ちたいと願うのも人情であろう。日本文化の研究者である梅原猛は、古代の日本人の「あの世観」を論じた後、以下のように語っている。

私もあの世へ行くなら、古代の日本人が信じたあの世がいいような気がします。極楽も地獄もそう行きたくない。やはりこの世と変わらないあの世へ行って、ときどき帰ってくる。いまは孫の顔を見ることが楽しみで息子の家へしばしば行きますが、孫はまだ小学生です。大きくなった孫の顔を見られないかも知れない。それでも見たい。また曾孫の顔は見られない可能性がとても強い。しかし、いつまでたっても孫や曾孫の顔を見たいというのが人間の願いですから、一年に何回かやって来て、そして子孫の顔を見て、子孫に大事にされて、また帰ってあの世で子孫の幸せや無事を祈るのが、人間として望ましい生き方のような気がします<sup>24</sup>。

ここで特徴的なことは、人の生前と死後の連続性であろう。まず現世と死後の世界の空間的連続性である。この世とあの世は断絶されたものとは考えられていなかった。『古事記』や『日本書紀』にはそのような考えが見られると指摘されている。死後の世界は「黄泉国（よもつく

に)」「常闇国(とこやみのくに)などと呼ばれ、太陽の光も届かない暗黒界ですべての人間の霊はそこに行く。しかし、黄泉国は、現世とまったく断絶されている場所ではなく、ある程度の往来が可能であるような近い場所に存在すると考えられていた<sup>25</sup>。古代イスラエル人の「陰府」にも似たような描写あることはすでに言及したが、死者がそこから出ることが可能であるというには決定的な違いがある。さらに、人が生きている状態と死んだ状態における連続性が見られる。死後には霊魂という形態になっているが、行動や態度は生前と変わらない。お盆を例に挙げると、死者の霊はこの世に帰って来て、生者からのもてなしを受けてあの世に戻る。生者は死者をあたかも生きた者のように扱っているのである。

このような連続性により、生者と死者の距離感は縮まっていく。両者の間に交流が生じ、互いに相互依存の関係ができあがることになる。生者は死者のために供養を行い、死者は生者に利益をもたらすという関係である。日本における死者儀礼はこの関係性において展開されていったものと考えられる。仏教の場合もそうであろう。仏教は民族固有の既成概念に、自分たちの信仰形態を築いていき、人々に浸透させていった。民俗宗教や原始神道が持っていた「死者が祖霊となり、カミとなる」という考え方を教えの中に取り込んでいったのである。死者のための通過儀礼としての仏事を繰り返すことで祖霊になるという。

さて、日本人がもつ死後の霊魂観とキリスト教の死後観の違いは明らかである。しかし、仏事が行われることの多い日本社会において、キリスト者が仏事に近い儀式を行うことを希望する人々の声がある。特に戦前にはその要望に応える努力をしたプロテスタントの教団もあった。マリンズは日本におけるキリスト教土着運動を研究しているが、1930年代から40年代に発達した土着化運動を行った教団の死者儀礼を取り上げている。祖先崇拜を取り入れようとする試みや記念礼拝として仏教の慣習を踏襲する実践があったことが見られる<sup>26</sup>。

しかし、われわれが確認した聖書の福音理解に基づいて考えるならば、仏事をそのまま踏襲してキリスト教の儀式を行う理由は見出すことはできない。死者は神と共にあり、死者に必要なものはすでに備えられていると考えるからである。また、仏事により死者の将来に変化をもたらせるというのは、中世ローマ・カトリック教会の煉獄思想における功績主義を思い起こさせる。キリスト教においては、死者は既に神と共にあり一切の功績を必要とはしないことが宗教改革者の主張であった。われわれは各々の思想や信仰を尊重し、仏事を行う日本人の死後理解や儀式を批判すべきではないことは言うまでもない。死後理解の違いにより、キリスト教ではそれが不要無いということである。

## おわりに

ここまで、死者の状態を考察しながら、キリスト教の死後理解を確認してきた。記念式では、死者の状態については基本的に聖書が沈黙を守っているので、勝手な想像を語る事をせず、神の恵みを語ることを主とし、信じて神にすべてを委ねることが主題となるであろう。もちろん死者の生前の面影を偲びながら、死者との現世における交わりを思い出すのは当然である。死者の平安を願い望むのも同様である。しかし、死者が今どのようにあるのかを問うべきではない。重ねてこのことを、強く主張したい。われわれは神の恵みに委ねるのであり、人知

を超える神の計らいを信じるのみである。

また靈魂不滅の思想については、われわれは注意を払わなければならない。特に、その靈魂観に基づいた儀礼の方法が作成されないようにすることが必要であるし、既存の葬儀の方法についても再検討の必要がある。

われわれが記念式を行う時には、死者のためには、既に死者が神と共にある恵みへの感謝をささげることが基本である。遺された者のためには、死者との別れによる悲しみや寂しさが癒されることを願うのである。そして、遺族や式の参列者は死者とこの世における交わりが与えられたことを神に感謝する。さらに、自分たちにも約束されている恵みを感謝し、確信する機会としたい。

しかし、課題はなお残っている。はじめに言及したように、キリスト教の記念式は、仏事と比較して少ない数である。死者との距離感は、仏教や日本古来の習俗と比較して、どうしても遠くなるだろう。死者のために何もできないというもどかしさから、死者を軽んじているというように捉えられることもある。これに関連して、韓国のプロテスタント教会でも同様の問題があることが古田から指摘されている<sup>27</sup>。韓国は日本と同様キリスト教の歴史は浅いが、信者数は2005年現在人口の三割を占めていて日本よりも教勢は勝っていて伝道も盛んである（カトリック含む）。しかし、日本と類似した状況も観察することができる。キリスト教信徒でも古来の儒教思想を自らのアイデンティティーとする人は多いようである。プロテスタント教会は伝来当初から韓国の伝統的祭祀を認めてこなかったが、一般信徒は韓国の伝統的な死生観と追悼式（日本の記念式にあたるもの）の世界観には葛藤を抱えているという。韓国でも伝統的な死生観では、人は死ぬと祖先神になり子孫を守りながら福を与えると考えられているが、キリスト教の教えとは相容れないために拒否されてきた。しかし、追慕という理解から追悼式を、極めて保守的な教派を除き、ほとんどの信徒が行っている現状である。ただし、それでも死者との交流という面において、「直接霊的な交流をしたい思いを断ち切らなければならない」という心の葛藤を語る信者の声も紹介されている。

われわれは、キリスト教の死後理解を基本にしながら、このような声にどう応えていくか、さらなる検討が必要であろう。記念式を行う回数を増やすことも、死者に対して丁寧な対応をするための一つの方法になると思われる。遺族に対するグリーフケアという観点からも良い機会になる。今後の課題としていきたい。

## 注、引用・参考文献

- <sup>1</sup> 「記念式」という名称以外に、「記念会」や「記念礼拝」という用語が使用されることもある。本論では日本基督教団の式文にある「記念式」を使用する。
- <sup>2</sup> 金文吉・芦名定道「死者儀礼から見た宗教的多元性—日本と韓国におけるキリスト教の比較より—」『人文知の新たな総合に向けて（21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」）』第二回報告書Ⅲ〔哲学篇2〕2004、8頁。
- <sup>3</sup> 岩村信二『三代目のキリスト教 伝統文化との対決から深化へ』信教出版社 1990、9-10頁。
- <sup>4</sup> 石居正己『ルターと死の問題 死への備えと新しいいのち』リトン 2009、91頁。
- <sup>5</sup> 油木洋一『「葬・墓」教会の今日的課題』『老い・病・死 教会の現代的課題』日本基督教団宣教研究所日本基督教団出版局 1993、147-149頁。

- <sup>6</sup> J・F・ホワイト（越川弘英訳）『キリスト教の礼拝』日本基督教団出版局 2000、435-437頁。
- <sup>7</sup> ウィリアム・ウィリモン（越川弘英訳）『牧会としての礼拝—祭司職への召命』信教出版社 2002、147頁。
- <sup>8</sup> 大林浩『死と永遠の生命』ヨルダン社 1994、50-51頁。
- <sup>9</sup> 大貫隆・ほか編『岩波キリスト教辞典』岩波書店 2002、459頁。
- <sup>10</sup> 関根清三「イザヤ書」『新共同訳旧約聖書注解Ⅱ』高橋虔，B. シュナイダー監修 日本基督教団出版局 1994、305頁。
- <sup>11</sup> Ries, Julien. "Immortality" in Death, Afterlife, and the Soul. ed. Sullivan, Lawrence E., New York: Macmillan Publishing Company, 1989, p. 269.
- <sup>12</sup> 加山久夫『新共同訳新約聖書略解』山内眞監修 日本基督教団出版局 2000、211頁。
- <sup>13</sup> 速水敏彦「テサロニケ信徒への手紙一」『新共同訳新約聖書注解Ⅱ』高橋虔，B. シュナイダー監修 日本基督教団出版局 1991、279頁参照。
- <sup>14</sup> 大林 浩、前掲書、101頁。
- <sup>15</sup> 同書、114-115頁。
- <sup>16</sup> 日本カトリック司教協議会教理委員会訳・監修『カトリック教会のカテキズム』カトリック中央協議会 2002、309-310頁。
- <sup>17</sup> 免償符は「免罪符」とも訳されているが、免罪符とは罪の償いを免除するものであり、罪の免除を意味するものではない。「贖宥状」と言われる場合もあるが、ローマ・カトリック教会では免償と訳している。石居正己、前掲書、73頁参照。
- <sup>18</sup> 石居正己、前掲書、69-70頁。
- <sup>19</sup> 同書、189頁。
- <sup>20</sup> 同書、187-188頁。
- <sup>21</sup> オスカー・クルマン（岸千年，間垣洋助訳）『靈魂の不滅か 死者の復活か』聖文舎 1966、29頁。
- <sup>22</sup> 大宮溥「教理史における死と葬儀」『死と葬儀』日本基督教団出版局 1974、106頁。
- <sup>23</sup> いくつかの調査からそれが示されている。例として「林文「社会調査からみる宗教・素朴な宗教的感情と死生観」『死生学年報 2007 第3巻 生と死の表現』東洋英和女学院大学死生学研究所編リトン 2007、134-137頁）では、靈魂の存在や死後の世界の存在を信じている人が20歳から65歳以上のどの年齢層においても、60%以上あり、人が死んでもその靈魂は家族と縁が切れることはないと回答した人は50%を超えている。
- <sup>24</sup> 梅原猛『あの世と日本人』日本放送協会出版 1996、58頁。
- <sup>25</sup> 小林栄「日本人の死と葬儀の理解」『死と葬儀』日本基督教団出版局 1974、209-215頁。
- <sup>26</sup> マーク・R・マリNZ（高橋恵訳）『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』トランスビュー 2005、170-190頁。
- <sup>27</sup> 古田富建「韓国キリスト教の死後儀礼（追悼式）—儒教文化との融合と対立—」『帝塚山學院大学研究論集リベラルアーツ学部44』2009、15-29頁。

（原稿受理 2010年9月21日）